【完】さくらんぼがり
１０

【完】さくらんぼがり　１０

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=20066982

モ腐サイコ100, 霊幻総受け

師匠総受けです。とある悪癖のある師匠です。今回は本番ありません。倫理がアレです。今回で完結となります。お付き合いありがとうございましたー❣️

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

【完】さくらんぼがり　１０

最上は霊幻の寝顔を眺めている。
生活感のあるアパートの一室は、雑然とはしているが不潔感は無い。
「……」
最上は、すっと手を霊幻に向かってかざす。
ずる、とその身体に入り込もうとした最上は、しかし青い光にはじかれた。
「何！？」

「おーすげぇな、このお札。最上啓示すら撃退すんのか」

にゅ、と霊幻の布団から、緑の人魂が顔を出す。その手には最上が霊幻に作ってやった札が５枚握られていた。
「悪意に対してオートで迎撃する兵器みたいなもんか。大したもんだ」
「……エクボくん、何故ここに？」
「アンタがいつもの時間にカラオケボックスに来なかったからな。もしやと思って大急ぎで札回収してここに飛んできたんだよ。……霊幻に何するつもりだった？」
「なぁに、ちょっと強姦でも」
「テメェの冗談は笑えねぇんだよ」
じ、と長い時間を見つめてきた瞳が最上を捉える。
「……あの男の記憶を消してやろうと思っただけだ。どうせなら綺麗さっぱり無くなった方がいいだろう？壊れている記憶だしな」
エクボは目を細めた。
「人間の記憶ってのは、意味があって脳の中に残ってるもんだ。……そんな事をすれば廃人になりかねない。それが分からないアンタじゃないはずだが？」
にやあと最上は笑う。
「廃人になった新隆くんも可愛いと思わんかね？」

「それは同意だがな、そうさせるワケにゃいかねぇんだよなぁ……
さてはアンタ、元カレの頭の中で見たくねーもん見ちまったな？」
最上は少し手元に目を落とす。
「……あの男が将来を誓いながらペアリングを新隆くんの指に嵌めた時、」
さら、と最上は霊幻の前髪を指ですいてやる。今度は札は発動しなかった。
「新隆くんは本当に嬉しそうに……幸せそうに微笑んだんだ。見た事の無い顔でな。見なければ良かったと思ったよ」
「まあそりゃあ、面白くは無いわな……」
「どうにも腹の虫が収まらなくてな。そうだ記憶消そう、と思い立ったというわけだ」
「そんな京都行くようなノリで……」
「上手く行けばトラウマも消せるぞ。正直あの男のせいで新隆くんがこうなったかと思うと虫唾が走るしな」
「それについてなんだがな」
エクボの低い声が落ちる。
「ちょっと思うところがあってな」
「……なんだね？」
「……カラオケボックス行こうぜ。あいつらにも話しておきたい」
２人はすうっと霊幻の部屋から出て行った。

※

「お、来たか悪霊組」
「遅くなったな」
「これで全員揃ったな？ひと段落ついたところで、今回の騒動について整理しておきたくてな」
ヨシフがガサガサと四つ折りにした紙を広げる。
「まずは訊いてみたいんだが、今回の騒動で１番得をしたのは誰だ？」
「……霊幻だな」
エクボが淡々と答える。

「質のいいセフレを８人も確保して、相談所も大幅に増員、しかも元カレに復讐もできた。一歩引いて見れば、結果的には霊幻の利益になることばっかりだ」
「ちょっ……と待ってください、」
茂夫が戸惑って待ったをかけた。
「もしかして、師匠が仕組んだって言いたいんですか？」
「……少なくとも、俺はそう思ってる」
「そんな、どうやって」
ヨシフの言葉に若人たちが戸惑う。
「……時系列で整理しよう。まず１１年前、ここで元カレと付き合って別れて、トラウマを負った。男遊びを始めて、条件付きＥＤになっていることを知った」
「で、記憶が壊れたんですよね？」
「いいや」
ヨシフはすっと指を下にずらす。
「記憶が壊れている、元カレを思い出せなくなっていることが確認できたのは、ここだ。最上啓示がそれを確認した時点だ。だからそれ以前は分からない。……時系列に戻るぞ。次、影山茂夫と出会ったのがココ、９年前だ」
「えっそれ要ります？」
「かなり重要な話だ。……というよりもだな、あいつが……霊幻新隆が仕掛けたのは、俺たちへの罠じゃない。影山茂夫、お前へのセーフティネットなんだよ」
「え？」
茂夫は戸惑って花沢や芹沢を見るが、みな戸惑うばかりだった。
「そしてここが事件発生、影山茂夫が霊幻に童貞を喰われたところ……なんだが、それ以前に起こっていたことがある。影山茂夫、エクボ、芹沢克也、影山律、花沢輝気、お前らが霊幻に好意を抱いていたのはいつからだ？」
「「「「「え！？」」」」」
茂夫たちはほんのり顔を赤くした。
「……僕は５年前くらいですかね。ツボミちゃんにフラれた後だから」

「僕は……３年前ぐらいかな」
ボールペンでヨシフは紙に影山茂夫、花沢輝気、と書き込んでいく。
「……俺も５年前くらいです」
「僕は言いたく無いです」
芹沢、律の名前が紙に書き込まれる。
「俺様は霊幻のことなんて」
「エクボ」
「……まあ、心憎くは思っちゃいなかったわな。シゲオと同じぐらいの時から絆されてたかもな」
カリ、とエクボの名前が芹沢の隣に記される。
「……霊幻は聡い。おそらく影山茂夫が好意を抱いたのに早々に気付いた筈だ。芹沢克也の気持ちにも、影山律や花沢輝気の気持ちにもな。そして自分がいわゆるサークルクラッシャーになっている事にも気が付いた」
トン、と花沢の名前をヨシフは指差す。
「この時点で、影山茂夫は他のメンバーの好意に気が付いていたか？」
「いえ、知りませんでした。……むしろみんなに師匠との事を相談してて……」
「この時点では、僕たち影山くんを応援してましたよ。……霊幻さんに告白するつもりは無かったです」
「ここで霊幻が何を考えたか、だな。まず、自分が影山茂夫と付き合った場合。影山茂夫は律、花沢、芹沢と疎遠になっただろう。場合によってはエクボともな」
「そんなこと……」
「無かったと言い切れるか？お前ら、影山茂夫と付き合った霊幻が幸せそうにするのを見る苦痛を、耐え続ける覚悟があったのか？」
「「「「……」」」」
「そもそも霊幻は自分と影山茂夫が付き合うことをいい事だとは思っていない。男遍歴が悪すぎる。他の選択肢を提供すべきだと考えただろうな」
「そんなこと……！」

「アイツが思うのはアイツの勝手だ。……じゃあ、正直に男癖の悪さを告白して影山茂夫をフるとする。……お前、諦めたか？」
「諦めないですね。正直、だからどうしたって感じですね。今後はやめて欲しいって言うだけです」
「そうだ。引き下がらない。そして若い貴重な時間を霊幻に消費することが容易に予想できた。だからフるのも悪手だ。そこで霊幻は思い付いた。影山茂夫の交友関係を壊さずに、自分を諦めさせる方法を。……コミュニティの繋がりを簡単に強化する方法は知ってるか？」
「……共通の敵を作る事だな」
鈴木統一郎が答えた。
「そうだ。霊幻は童貞どもを刈って、その怨みを自分に向けさせる事にした。百戦錬磨のあいつにとっちゃ、造作もないことだったろうよ」
「……待ってください。もし僕が芹沢さんに連絡を取らず、そのまま師匠の前から消えていたらどうするつもりだったんですか？」
「その場合は霊幻の『自分みたいなビッチに引っ掛らせない』という目的は達してる。それはそれで良かっただろうな。言ったろ。あくまでアイツが仕掛けたのは影山茂夫へのセーフティネットだ」
「……」
「あいつは二重三重にセーフティネットをかけた。お前らが『何故影山茂夫と肉体関係を持ちながらも付き合わないのか』と詰め寄って来た時の為に、元カレの事がとんでもないトラウマである事にしないといけなかった。だからアイツは、自分で記憶を壊したんだ」
「……最上さん、そんなこと可能なんですか？」
「出来なくは無いな。ただし、かなりの苦痛を伴うぞ。壊したい記憶を何度も何度も敢えて思い出して、一度発狂するんだ。そうすると脳の安全スイッチが働いて、その記憶自体を壊す。……おススメはせんな」
「まあ、霊幻ならやってのけるだろうな。弟子の為になるならなんでもするさ。それこそ弟子に被害者だと錯覚させることもな」
「錯覚？」
皮肉そうにヨシフは笑う。

「まあまあ穴兄弟ども、よーく考えてみようや。……童貞ってのはそんなに価値があるものだったか？いつ、誰が童貞に価値を付けた？俺たちが犯したのに、『身体だけが、童貞が目当てだった』とむしろ被害者だと思ったのは何でだ？」
「……師匠が僕に謝ったからだ……」
呆然として茂夫が呟く。
「初めての夜、酔った師匠に手を出したのは僕なのに、目覚めた師匠に『本当に悪かった』って言われたから、僕は酷いことをされたんだと……思って……え……？」
茂夫は戸惑う。
「どれだけ男遊びをしてようが、影山茂夫の想い人だと言うだけで霊幻は高嶺の花だった。でも『影山茂夫の童貞だけを喰って捨てた』『童貞なら誰でもやらせる』という情報を与えることで、霊幻は自分へのハードルを下げたんだ。影山茂夫が引き下がらなかった場合に他のメンツが霊幻に手を出して、被害者（仮）になり易くする為にな」
「目的は、影山茂夫の周囲のコミュニティの強化……」
「影山茂夫を振った、童貞ならやらせてくれる、って知って、チャンスだと思った奴もいたんじゃないか？……ドラッグを売る手口と一緒なんだよなぁ。みんなやってる、最初の１回は格安かタダ、ってしておいて、癖になったら高く売りつける。アイツは自分の身体の価値を知っていた。一度ヤればかなりの人間が落ちることもな。そこでフって童貞だけが目的だったと言えば……被害者意識を植え付けるのはそれほど難しくは無かっただろ。……既に被害者として集まっている連中が居れば尚更だ」
「まあ、『被害者の会』っての、俺はちょっと違和感あったんだよなー」
頭の後ろで手を組んで将が呟く。
「俺は霊幻さんに迫ってヤらせて貰ったのに、被害者？かなあ、って。でもみんな被害者だって言ってるから、あーそうなのかなーって黙ってただけで」
「でも、師匠は童貞以外とヤるのはしんどい、出来ればしたくない、って……」

「そこも思考誘導されてんだよ。童貞以外にアイツが勃たないのは事実だ。だが、童貞以外とヤるとしんどい、って言うのはあくまであいつの主張だ。現にセフレがいただろ」
「でも、迫られて押し切られたって……」
「それも『主張』だな。……事実かどうかは確かめようも無い。さて、影山茂夫に自分を諦めさせることは失敗した。ならばなるべく早く、影山茂夫の周りのコミュニティを固めたかった。そこはアイツの手練手管だ。童貞喰いどころじゃ無い。アイツがやったのは童貞狩りだよ。誘ったり、隙を見せたり、嫉妬させたり、相手によって手口を変えて手を出させた」
「……最上さんはどうなんです？」
「イレギュラーだったが、使えると思ったんだろ。最上が記憶が壊れていることを証言してくれるし、アイツが落とせるタイプだとすぐ判断した。……まあ話を聞くに、助けが来るまでの時間稼ぎの側面もあったっぽいがな」
「……」
最上は黙々と茂夫に憑依して揚げ物盛り合わせを食べている。
「俺や鈴木将はどっちでも良かったんだろ。最終的にこのコミュニティが強化されて、影山茂夫が『抜け駆け』がしにくくなればそれでいい」
腕を組んで茂夫はうなる。
「ここまで仲良くなっていて、他のメンバーの好意を知っていれば、影山茂夫は性格的に自分だけが霊幻と付き合おうとはしにくくなるはずだ」
「それは……」
「影山茂夫と恋人関係にならずに、影山茂夫のコミュニティを保持する。元カレのことは……あいつの性格的にどうでも良かったんじゃないかな。復讐はできても、できなくても。あいつにとって元カレの優先度は低かっただろう。トラウマとして利用できれば後はどうでもいい。……付き合いはセフレ止まり、影山茂夫には強力なコネができ、まあ見事に、霊幻新隆の目的は達成できたわけだな」
「でも師匠は、過呼吸にまでなって……にわかには信じたくないです」

「そう、そこなんだよなぁ！俺たちは霊幻は純粋で、か弱くて、他人の好意を利用するような奴じゃないと信じたいんだよ。騙されていたい。……そもそもアイツが過呼吸持ちになったのはいつだ？俺はあいつとは結構長い付き合いだが、過呼吸なんて一度も見たことも聞いたこともないぞ」
「……記憶を壊した後……？」
「たぶん、そこだろうな。記憶を壊したことの弊害だろう」
ヨシフは紙に過呼吸？と書き足した。
「……なんて野郎だ……なんか言うことねぇのか、最上の旦那？」
「……ん？私かね」
ガツガツと抹茶パフェを食べていた最上が顔を上げる。
「パフェなんか置いとけよ」
「すまんね、甘さと苦味の絶妙なハーモニーが……」
紙ナプキンで最上は口元を拭った。
「まあそうだね、私はこのタイミングでヨシフくんがその話をすることによるメリットが気になるな」
ざわ、と若人が騒めいた。
「その仮説が正しいとしよう。それで我々が新隆くんから手を引いて、この会も解散したとして、それで助かるのは誰かね？」
「……ヨシフさん？」
「そうだな。我々が手を引いた後に新隆くんにアプローチすればいいし、それにこの危険な集まりを監視もしなくて良くなる。まあこれは２次的な成果だが……」
最上は紙を引き寄せる。
「この時系列には欠けている情報がある。ヨシフくん、キミが新隆くんに好意を抱いたのはいつかね？」
視線がヨシフに集まる。
「……あいつとやった後、」
「嘘だな。もっと前のはずだ。私に嘘が通用すると思わない方がいいぞ？なんなら頭に入って確認してもいいんだからな」
「……」
ヨシフは黙り込む。
「ま、その沈黙こそが答えだな。適当に花沢くんと同じ時期だった

として……２人は結構飲みに行っていたそうだな？男遊びのことを知っていたヨシフくんには、新隆くんは多少なりとも卑猥な話もしていたことだろう。酒の席だしな。新隆くんに好意を持っていたヨシフくんは……どんな気持ちでそれを聞いていたんだろうな？」
「……」
ヨシフは煙草に火をつけた。
「そもそもだ、新隆くんの企みにヨシフくんが気付いたのはいつかね？」
すぱー、とヨシフは煙草の煙を吐く。
「おそらくはここだ。相談所に来て、その場の全員と関係を持っている事を知った時。『今まで相談所のメンバーには男遊びのことをひた隠しにしていたのに、おかしい』……キミならそう気付けたんじゃないかね？」
「……」
ヨシフは煙草を吸い続ける。
「この時点まで待っていたのは、メンバーが確定するのを待っていたからだ。せっかく散らしても、また別のメンバーで結成されたらたまらないからな」
「……それこそアンタがそれを言うメリットはなんだ？」
ヨシフは煙草で最上を指した。
「何、若者を煙に巻くのは感心せんなと思っただけだよ。私はどっちでもいい。キミたちが新隆くんから手を引くなら独占できる時間が増えるし、引かないならこうやって集まって歓談しているのは中々に楽しい」
最上はパフェをつつくのに戻る。
「……結局、悪いのは霊幻さんってことでいいのかな……？」
「芹沢、お前は何を聞いていたんだ」
「うーん、上手く言えませんけど……霊幻さんがそれを望んだのなら、俺はそう思っていてあげたいなって、思うんです」
芹沢は統一郎に返す。
「社長はどう思うんですか？」
「私は……」
統一郎は不安げな息子の目を見る。

「……将が決める事だと思う。何が正しいかとか誰が悪いかとかはどうでもいい。将が幸せに成れる道を選んで欲しい」
ほ、と将は肩の力を抜いた。
「……俺はさぁ、そんな重たく考えて無いんだよね。霊幻さんとセックスできるのは嬉しいし、この集まりも楽しい。正直、超能力者特有の悩みとか、ここ以外で話せないし。これを霊幻さんが仕組んだんなら、『やるじゃん』としか思えないかなー」
「……僕も、兄さんとの関係が壊れないままで霊幻さんとヤ……関係を持てたのは、奇跡だなって思ってる、かな」
律が辿々しく言った。
「……僕、実は結構霊幻さんを疑ってたんだよね」
花沢は苦笑した。
「こんなこと思ってるの僕だけかなって思ってたから、エクボくんとかヨシフさんとか、同じ事思ってる人がいるんだな、って安心した。だからと言って現状にそんなに不満は無いんだよね……この集まりもざっくりしてて気楽だし、明後日は僕の番だし」
てれ、と花沢は頬を赤くした。
「オイオイオイ玉無しばっかりかぁ？霊幻に一泡ふかせてやりたいとは思わねぇのかよ、お前ら」
「エクボ……師匠に何するつもり？」
「いや……別に……ちょーっと痛い目に遭わせてやろうってだけじゃねぇか！」
「何のために？」
「は？いやだってあいつが……」
「エクボ、師匠の愛を試しちゃダメだよ。それじゃあの人と同じだ」
「それに悪霊が悪事を働こうってんなら俺も黙って見ちゃいられねぇな？」
「ヨシフ！何さらっとそっち側回ってやがる！！」
「俺ぁ別に先生をどうこうしようとは思っちゃいねえよ」
ぐぬぬ、と悔しそうにエクボがウィスキーを飲み始めたヨシフを睨んでいる。
「おい、シゲオはこれでいいのかよ！」

「僕は……」
ごくりとアイスミルクで喉を湿らせて。
「こんなに師匠に愛されてたんだ……！！」
目をキラキラさせる茂夫にエクボは額を押さえた。
「僕は……愚かかも知れないけど、今ある物を大切にしたい。師匠の思い通りかもしれないけど、この会も大事だし、師匠が残してくれた師匠の側にいる権利だって、大事にしたい。……師匠は僕たちの関係を無茶苦茶にしたって良かったんだ。面倒くさいからって僕と付き合って、適当な所で捨てたって良かった。でもしなかった。自分を犠牲にして、僕のための、みんなのための最善を探してくれた……！」
ぎゅ、と茂夫は手を胸に当てて握る。
「嗚呼、やっぱり好きだなぁ……」
どこか仕方無さそうに皆が茂夫を見る。
「結局……霊幻のことはどう考えたら良いんだよ……」
「自分で考えなさい。自分で答えを出すんだ、影山くんのようにな」
エクボに最上が言い切った。
「あ、なぁなぁ！今度このメンツでバーベキューしにキャンプ行かねぇ？知り合いが屋根付きサイト安くで貸してくれるって！」
「おーいいな。俺酒持ってくわ。お前ら休みいつだ？」
しれっとヨシフが将にのる。
「え、キャンプかぁ……」
茂夫が困った顔をした。
「あれ？律の兄貴は嫌いだっけ？」
「いや、好きだよ。だけど、このメンバーでキャンプに行ったって知ったら師匠すねるだろうなあと思って……」
「じゃあ霊幻さんも連れて行こうか」
芹沢が提案する。
「おーいいじゃん！」
「……いやそれ何の集まりなんだよ！！」
エクボの突っ込みに、笑いが起こった。

「全て世はこともなし」

完